

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



令和2年度

郡山市おもいやり作文コンクール

優秀作品集



郡 山 市

もくじ

■もくじ

..... 2

■作品

【最優秀賞】

障がいのある方と自分とのかかわり	郡山市立芳賀小学校	五年	清野	ひらり	5
独特な個性	郡山市立郡山第一中学校	一年	藤田	愛己	6

【優秀賞】

しょうがい者とともに	郡山市立芳山小学校	四年	栗林	心彩椛	10
手話で広がる可能性	郡山市立高瀬小学校	六年	小林	綾莉	12
私のお姉ちゃん	郡山市立芳賀小学校	四年	有我	香甫	14
障がい者と私たちのかべ	郡山市立永盛小学校	六年	松井	愛実	16
ろう学校のお友達	郡山市立大槻小学校	六年	君島	華蓮	18
目指すべき共生社会	郡山市立日和田中学校	三年	鍵谷	咲妃	20
共生	郡山市立郡山第三中学校	二年	齋藤	莉穂	22
思いやりの心	郡山市立郡山第一中学校	三年	大原	あい	24

【佳作】

みんなに知ってほしいゆうくんの事	郡山市立小原田小学校	四年	相馬花奏	28
障害を持つ人への親切	郡山市立富田東小学校	五年	大迫楓	30
障害者との関わり方	郡山市立永盛小学校	六年	大越晴琉	32
スポーツをとおして	郡山市立永盛小学校	六年	佐藤悠希	34
障害者と私達の生活の違い	郡山市立永盛小学校	六年	吉田結衣	36
できることを、一つずつ	郡山市立郡山第二中学校	一年	田村実愛	38
障害を持っていたとしても	郡山市立郡山第二中学校	一年	遠藤美佑	40
障害者と共に生きる	郡山市立安積第二中学校	二年	山本芽依	42
学ばなければならぬこと	郡山市立郡山第三中学校	二年	赤沼優香	44
今の現状と私たちができること	郡山市立郡山第五中学校	二年	土田紗友莉	46
Feelings for each other	郡山市立郡山第一中学校	三年	佐原佑徠	48
思いやりの心を広げるために	郡山市立郡山第一中学校	一年	五十嵐眞子	50

■講評

.....

53

■実施要項

.....

55

■作文応募状況

.....

57

【最優秀賞】

障がいのある方と自分との関わり

私は、障がいのある方を下校中、買い物中に見かけます。足が不自由な方、目が不自由な方、耳が不自由な方たちです。しかし、見た目だけで、同じ人間です。生活のしかたも自分とはちがうと思います。体のどこが不自由な方は、生まれたときから、事故にあっけしき、不自由になってしまった方、いろいろな方たちがいます。その方たちについて考えたことが二つあります。

一つ目は、他の人と同じように接することです。理由は、体の不自由な方たちは、自分の不自由なところがいやかもしれません。なので特別な気を使わないことや、他の人と同じ接し方をした方が良いと思いました。

二つ目は、こまっていたら、助けることです。例えば、段差があり、車いすの方がこまっていたら、一言かけて、おしえてあげたりして助けてあげたら、その方もうれいと思います。私も見かけたら、助けてあげたいです。体の不自由な方たちは、自分だけでは、できないことがあると思うので、私たちが見かけたら、助けるべきだなと思います。

郡山市立芳賀小学校 五年 清野 ひらり

障がいのある方にとってのまちづくりとは、何か二つ考えました。

一つ目は、「バリアフリー」を増やすことです。例えば、お店に入るまでに短い階段があったとすれば、ゆるやかな坂にしてあげたり、電車や新幹線に乗るときに入り口にすぎ間があるので、道具を使って、平らにしてあげたりすることです。

二つ目は、障がいのある方たちが働ける職場を増やすことです。理由は、ふつうのスーパーマーケットでは、どれだけ漢字の読み書きができて、お客さんとうまくしゃべったりできないと働けないから、そういう方たちが働ける職場が増えてほしいです。実際に私の家から車で五分くらいのところに障がいのある方でも働けるカフェがあります。カフェだけではなく、他の職業のお店もあったらいいと思います。

私はこのように考えました。体の不自由な方たちといっしょに接するためにどのようにすればよいかを考えて、改めて、障がいのある方がこまっていたら、助けてあげたいと思いました。

独特な個性

私は、今まで手足が不自由、耳が聴こえない等の身体障害ばかりを考えていましたが、私は、別の障がいもあるのだと気付きました。

私が、初めて独特の個性の持ち主と接したことがあるのは、小学二年生の時に同じ空手道場に通う同級生の男子でした。私も彼もまだ、入門したばかりだったのでお互い白帯でした。ところが、彼の口から出てくる言葉は耳を疑うものばかりでした。

「試合に出たら、僕は優勝する。僕は、金メダルしか取らない。」

と豪語していました。常に、自分中心の発言で周りの空気を読まず、落ち着きがなく、先生が指導しても全く違うことを平気でする子でした。私のこともよく馬鹿にしていました。私は、一緒にトレーニングをしながら、「何故、みんなと一緒にやらないの？」と聞くと、そのことには触れずにファッションの話や地震の話をしてきたので、表面上は話を合わせ、頷いていましたが、

郡山市立郡山第一中学校 一年 藤田 愛己

「なんだ、ちょっと変わっているな。」
と、心の中でつぶやきながら接していました。

私は、その子に言われたこと、やっていたことを全て母に話しました。幼い私としては、母が共感してくれると思っていましたが、私の話を聞いた母が意外な言葉を口にしました。「愛己：その子は全く悪気はないんだよ。その子は一寸、みんなと違った個性を持っているんだよ。独特な個性だから、もう少し違う見方は出来ないかな。」

母がその子のことを「独特な個性」と表現したことに驚いたことを今でも覚えています。

間もなく、その子は道場を去っていきました。今となれば分かります。その子にとって居場所がなかったということに。次の出会いは、小学三年生の秋でした。私の通う道場に入門してきた彼は同級生でした。

彼もまた、独特な個性の持ち主でした。練習中に突然走り出したり、休憩中には、先生の前に行き、図書室で借りた鉱石の本を開き、一方的に話していました。みんなは、彼のこ

とを馬鹿にして、うす笑いを浮かべていました。彼も少しずつ孤立していきました。

以前、母が言っていた「独特な個性」ってこれなのかもしれないと、なんとなく分かるような気がしました。

彼は、すぐく本を読み、話題が豊富で私を持ち合わせていない視点を持っていました。私は、彼と普通に話していましたが、周囲の冷たい視線を浴び、私自身も浮いていくのが分かりました。彼も結局、一年足らずで辞めてしまいました。彼が、道場を去ったことで、私の心に罪悪感のようなものが残ってしまいました。

あれから二年後の夏、ある図書館で彼と再会しました。

「やあ、愛己君。」

彼は、ひよろりと背が伸び、眼鏡をかけていましたが、あの頃と同じ笑顔で独特な世界観満載の話題に懐かしさと嬉しさが込み上げてきました。彼がふいに、

「愛己君、いつも僕の話聞いてくれてありがとう。愛己君だけは、僕のことを分かってくれていたから何でも話せたんだよ。」と言つと、彼は手を振り、その場を後にしました。彼からの思いがけない言葉を聞いて、自分は、間違っていないかっただという思いと、心の片隅にあった罪悪感が思いつきり弾け飛んだ瞬間でした。

昨今、いろいろな障がいを抱えている人達は多くいます。

その人達を見えない差別や偏見という壁の中に閉じ込めているのは、私達一人一人の心の未熟さなのではないでしょうか。自分達が勝手に決めた枠から逸脱した人を馬鹿にし、蔑むという行為こそが差別や偏見の元凶だと率直に思います。私達が彼らの個性を心で受け止めることが差別や偏見をなくす大きな一歩だと思えます。



【優秀賞】

しょうがい者とともじ

わたしは「聲の形」という映画をきっかけにこの作文を書くと思いました。

このお話は耳が聴こえない女の子といじめっ子だった男の子が、成長していく物語です。ある日、障がいのある女の子西宮が、いじめっ子の男の子石田の小学校に転入してきます。西宮は耳が聞こえないのでみんなとノートを使って話します。石田は、西宮が耳の聞こえないことをおもしろがっていろいろないたずらをします。耳の近くで大きな声を出したり、補聴器を奪い取ったりしました。そしてある日、補聴器を取られた時に西宮は耳から血を流してしまいました。

わたしはこのような出来事が本当にあるのかと思ひびっくりしました。もし、本当にこんな風に障がいがあるからいじめられている子がいるならわたしはいじめられている子になにもしてあげられないのがとってもくやしいです。だから、わたしは少しでもそついういじめがなくなるように考えてみました。

まずは障がいがある人のつらさや生活する大変さを分か

郡山市立芳山小学校 四年 栗林 心彩椛

ってあげないといけな思いました。もし、自分の足が片方だけだったら高い段差はあがれません。もし、自分の目が全く見えなかったら、外に出て行くのがこわいです。もし、自分の体が全身マヒだったら、だれかに助けてもらわないと生きていけません。それが自分ではなく家族だったとしても生活していくだけで大変なのに、さらにいじめられたら、その人の人生はとてめかなしいものになってしまいます。わたしは障がい者の人たちの生活が大変な分、周りの人のたくさんやさしさで心をいやしてあげるべきだと思います。

次に障がいがあるから、障がいのない人たちと同じことはできないと決めつけてしまうのも仲間外れにされる原因になると思います。みんなできたいことを障がいがある人もない人も一緒にやってみて、やっていく中でみんなで楽しめるようにルールを変えていってあげればいいと思います。みんなと同じことをして、みんなの気持ちが一つになれます。みんなの気持ちが一つになれたら、その仲間のつらさや悲しみも感じる事が出来るようになると思います。

三つ目に、障がい者の人たちを助けてあげるだけではなく、障がい者の人たちから教えてもらって学ぶことも大切だと思います。例えば耳が聴こえない人から手話を教えてもらったり、障がい者スポーツ選手からトレーニングやルールを教えてもらうのもいいと思います。自分にはない知識や技術を教えてもらうことで、お互いのことを尊敬し合えるのではないかと思います。

最後にわたしは障がい者の人たちの気持ちを理解して、いろんな便利な物を開発してあげたいです。耳や目など体が不自由な人に対して補聴器や体を支える器具のほかに、最近はいAI機能が進んでいるので、AIの力でその人達の生活をより楽にしてあげたいと思います。わたしは障がいのない人である人が、いじめや差別なしで楽しく会話や運動をする世の中であってほしいです。そのためには一人一人相手の気持ちを分かり合うことが大切で、みんな心で思うことは一緒ということがこの作文で伝わるといいなと思います。

手話で広がる可能性

生きていくうえで、もっとたくさんの人と話してみたい、と思った。そのためには、どうすれば良いのか、母と話しているとき、

「手話を使っていれば、耳が聴こえない人とも話せるようになるんじゃない。」

と、「手話」を教えてくれた。たしかに、手話のニュースに出ている人はかっこいいし、何より耳が聞こえない人と手話を使って話せたら、世界が広がりそうだなと思った。

そこで、私は手話についていろいろ調べてみた。そのうちに、手話には検定があることが分かった。「手話技能検定」には、全部で九つの級があり、その中でも、いちばん下の級の七級は、約一か月の勉強で受けられるということを知り、とても興味がわいた。

さっそく、テレビや本を見て勉強を始めた。もっと勉強して、早く検定を受けてみたい。

手話を勉強することで、手話にまつわる話題にも興味がわいた。

郡山市立高瀬小学校 六年 小林 綾莉

ラジオを聞いていると、気になるお店を知った。「スターバックスサイニングストア」というお店だ。「スターバックス」というのは、私も行ったことのあるコーヒーショップだ。「サイニングストア」は、スターバックスの中でも、聴覚に障がいのある従業員が中心となって店舗運営を行う店舗だそう。だ。「サイニング」とは「サインランゲージ（手話）」のことだ。このお店では、手話や筆談、指さしのメニューを使ってコミュニケーションをとる。私がいちばんすてきだと思ったのは、そこがサイニングストアだと知らずに入ってきたお客さんが、入ってから出るまで、特別なお店だと分からなかった、というエピソードだ。

私は、これはとても良いことだと思う。今まで世界中に「スターバックスサイニングストア」は四つあったが、日本は世界で五つ目のお店だったそう。これからもっと障がいを持つ人が暮らしやすい世の中になると良いと思う。「スターバックスサイニングストア」のように、お客さんが特別なお店だと気付かないくらい気軽に、そして当たり前前に障がい者の

人も過ごせる世の中になれば良いと思う。また、そんな世の中になるように、私もいろいろなことをしてみたい。これからも、手話をたくさん勉強して、聴覚障がいの人ともたくさん話してみたいと思う。そして、「手話で広がる可能性」を無限に広げたいと思った。

私のお姉ちゃん

郡山市立芳賀小学校 四年 有我 香甫

私のお姉ちゃんは、自閉症という障がいをもっています。最初はお母さんからお姉ちゃんについて、「お姉ちゃんは、困っていることが多くて、自分の気持ちを人に伝えるのが苦手で、できないことも多いけれど、すごく優しい気持ちをもっているんだよ。」と教えてもらっていました。その後、自閉症という障がいだということを知りました。それから自閉症について、いろいろ知りたいと思い、お母さんが読んでいた『光とともに…』という自閉症の男の子が出てくる漫画を読みました。

そのマンガに出てくる光君は、私のお姉ちゃんと同じ自閉症です。大きな音が苦手だったり、人がたくさんいる所が苦手だったり、一つのことを最後までできちんとやらないと気がすまなかったりします。私のお姉ちゃんと同じで、一日のスケジュールがあると生活しやすかったり、耳で聞いたことより目で見たほうが分かりやすかったり、整理整頓された場所が落ち着けることなどが分かりました。

一番心に残った場面は、光君のお母さんが学校の参観日で、

自分の思いを伝えられない光君に代わって「ぼくは大きくなったら、元気なはたらく大人になりたいです。」と話した場面です。私のお姉ちゃんも大人になったら、元気に楽しくはたらくってほしいなと思いました。

お姉ちゃんのことで大変なことは、すぐに物をこわしてしまったりすることです。何度もゲーム機をこわしてしまいました。だけど力のかげんが苦手なので、仕方がないなと思います。あとは、具合が悪い時にそれを伝えられないことが大変だなと思いました。そんなときは、お母さんが絵カードや紙に具合の悪い所を書いて伝えられるようにしています。

お姉ちゃんの得意なことは、みんなの誕生日を覚えたり、数字や曜日覚えたりすることです。私がいっつも何日の何曜日かわからないときに、すぐに笑顔で教えてくれます。

いつもお姉ちゃんは優しくかわいがってくれています。私もお姉ちゃんのことをよく分かってあげて優しくしたいと思います。

お姉ちゃん以外の障がいのある人を助けたり、もっとみんな

なに障がいについて分かってもらえるようになればいいな
と思います。

私の好きな言葉は「みんなちがってみんないい」という言
葉です。私のお姉ちゃんは人とちがう所が多いけど、他のみ
んなも同じではありません。自分とちがう人がいてあたりま
えだと思います。だから私のお姉ちゃんの自閉症という障が
いも特別なことではないと思っています。

障がい者と私たちの“がべ”

郡山市立永盛小学校 六年 松井 愛実

「あの人かわいそう。」

相手を思ってた言ったその言葉は、実は障害者にとって、一番とっていいほど言われたくない言葉・思われたくない言葉だそう。

「なぜ、相手を思ってたのにだめなのだろう。」そう思った人は決して少なくはないだろう。障害者にとって自分のことを思っているのはうれしいが、「自分とはちがう」と思われるのは「いや」という理由があるらしい。

そこで私は、障害者にはどんな人がいるのか。障害者が暮らしやすいようにするには、私たちが障害者に手を貸すことはできるのか、などを考えてみた。

まず、障害者には色々な人がいる。その中の「視覚障害」について、最初に考えてみることにした。視覚障害というのは、目が見えない障害のことをさす。視覚障害の中で、まったく目が見えないか、ほとんど見えないことを「盲」というらしい。

この前、テレビで視覚障害者にインタビューをしていた。

「目が見えないと一人では何もできないと思われるのはいやですね。」

と視覚障害者が言っていた。そして、アナウンサーが、どういうときに困るか聞いた。

「障害がない人が赤信号でわたると私のような視覚障害者は、あっ、もうわたっていいんだ」と勘違いして、わたってしまうことですかね。」

私はそのことを聞き自分の行動が視覚障害者を困らせてしまうことが分かった。最近、友達と遊ぶ約束をして、早く帰りたいと思い、信号を青より少し早くわたってしまった。その時に、視覚障害者はいなかったが、もしいたら大変なことになっていたと思う。

また、アナウンサーがまちづくりについての願いは何かと聞いた。

「もっとエスコートゾーンを増やしてほしいですね。エスコートゾーンというのは、横断歩道の中央にあるブロックつきのゾーンのことです。」

と話していた。私は、あまり街中でエスコートゾーンを見たことがない。けれど、もしエスコートゾーンがなければきっと、視覚障害者は困ると思う。なので、エスコートゾーンは増やしたほうがいいと思う。

次に「聴覚障害」について考えてみた。聴覚障害は耳が聞こえないことをさす。聞こえないことを「ろう」。聞こえないことを「難聴」というらしい。私のクラスメイトの家族は、ほぼみんな手話をする事ができる。私は、そのことを知りたくさんの聴覚障害者と仲良くなりたいと思い、手話の本を借りてみた。けれど、手話はとても難しかった。なので、ちがう方法で仲良くなろうと思った。一つ目は、紙にペンで文字を書き、それを相手に見せるという方法。二つ目は、口の形や表情を見せ、自分の話していることが相手に分かるようにする方法の二つだ。

また、聴覚障害者に大事な音や声を知らせる「聴導犬」がいることを知った。聴導犬といっしょに生活するうえで不便なことは、店に聴導犬をいれられないことらしい。聴覚障害者にとって、聴導犬は大事なパートナーなので、もっと聴導犬をいれられる店が増えたほうがいいと思った。

視覚障害や聴覚障害のほかにも、体を自由に動かすことができない肢体不自由、脳の特性で読む、書く、計算することが苦手な学習障害などがあるらしい。このほかにもたくさん

あり、それぞれの障害にあったまちづくりなどが必要ではないだろうか。そして、障害者は自分とはちがうと“かべ”をつくるのではなく、想像し、共感し合うのが大切だと思う。一人の一步の勇気がたくさん集まれば、きっと“かべ”はなくとせると思う。

ろう学校のお友達

郡山市立大槻小学校 六年 君島 華蓮

私の学校では、近くにあるろう学校のお友達が学校行事と一緒に参加します。

五年生の時のなわとび大会の時のことです。ろう学校のお友達が、みんなの前で目標を発表しました。手話も使って話していました。その時、周りから笑い声が聞こえて、私も一緒に少し笑ってしまいました。先生が、なぜ笑ったんですか。笑ってはいけません。と言いました。私はそのことをずっと後悔しています。

その日、家に帰ってから、もし自分が逆の立場だったらと考えました。みんなの前で緊張して発表しているときに笑われたら、とても悲しい気持ちになるし、自分が努力をして身に付けたことを笑われたらとてもくやしいです。ろう学校のお友達は、楽しみにして来てくれていたはずなのにそれをいやな気持ちにさせてしまったと気づきました。いやなことをされたらいやな気持ちになるのは、耳が聞こえなくても一緒のはずなのに。その後の行事の時は笑う人はいませんでした。きっとみんなと同じ気持ちになったのかなと思いました。

以前、学校探検でろう学校を見学させてもらいました。その時、おせんべいの真ん中を舌でなめて穴をあけていくトレーニングを体験しました。舌の力をきたえて、舌を動かすことを覚えさせるトレーニングだそうです。私達耳が聞こえる人にとっては話すとき意識しないで舌が自然に動いているけれど、耳の聞こえないお友達にとっては大切なトレーニングだということがわかりました。話すためにたくさんトレーニングしたり、それ以外にも手話を覚えたり、すごく努力をしていることもわかりました。また、ろう学校のお友達は、私達にとってもやさしくわかりやすくやり方を教えてくれました。相手の気持ちを考え、行動しているんだと思いました。私は朝、目覚まし時計で起き、登下校の時は車に気をつけ、音楽を聞いて歌ったり、常に音を聞いて生活しています。以前テレビで耳が聞こえない子の母親が、その子の気持ちをわかってあげたくて、自分も耳が聞こえない生活を体験していました。すると、生活の中には耳が聞こえないことによって不便なことや危険なことがたくさんあることに気づいたと

言っていました。ろう学校のお友達も、私達と一緒にスポーツをしたり何でもできるけど、きつと不便に思ったことや危険に感じたことがあったと思います。私は、周りの人に助けてもらいながら生きています。それはだれでも当たり前のことなので私も困っている姿を見かけた時は、手をさしのべられるようになりたいです。

ろう学校のお友達のように障がいを持つ人も持たない人も楽しい気持ち、悲しい気持ちがあることは、みんな一緒だと思いました。だからいやなことをされたいやな気持ちになるのも、やさしくされたいやうれしい気持ちになるのもみんな一緒です。人を悲しい気持ちにさせるようなことはもうしたくないです。これからは相手の気持ちを考えて行動し、助け合いながら生活していきたいです。私は、ろう学校のお友達と出会いたくさんのことを学ぶことができました。

目指すべき共生社会

障がいを持つ人にとって暮らしやすい社会とはどのようなものか、私も考えてみた。車イスの人でも楽に登れるスロップがあることだろうか、それとも音で知らせしてくれる信号機があることだろうか。確かにこれらは障害を持っている人の暮らしを支えるためのものだ。しかし私は、私達が思いやりの心を持ち、障がい者に対する理解を深めることが、障がい者にとって暮らしやすい社会を作るための第一歩だと思う。

障がい者の暮らしをサポートするものとして、目が不自由な人を安全に誘導するための点字ブロックがある。でも、この点字ブロックが私達の安易な行動で使えなくなってしまうとしたら。それはもう暮らしやすい社会とは言えなくなってしまう。

私は自転車(point字)ブロックを邪魔している写真を見たことがある。自転車を停めている人は自分は使っていないから、気にしていないのだろうか。でも目の不自由な人の立場に立ったとき、道の真ん中に自転車が置いてあったら誰もが「邪

魔だ。」と思うはずだ。点字ブロックを利用して歩いている人とそうでない人との価値観の差がこのような問題を引き起こしてしまっているのかもしれない。

また、偏見を持った人がいる社会は、障がい者にとって暮らしやすい社会とは言えない。健常者の中にはきっと障がい者の努力を知らない人がいる。そして、そういう人の中には障がいを持っていることで差別をし、変人扱いをする人もいる。健常者じゃないから。その偏見を持った考え方で人を傷つけていると思うと私まで悲しくなった。

私は毎年八月下旬には、二十四時間テレビを見る。私はこの番組を見て障がい者に対する見方が改まった。私が一番心に残っているのは耳が聞こえない子供達の映像だ。私はそこで、難聴の子供達は手話、または口の動きを見て会話をしていることを知った。そして、口の動きを読む話話は、相手の癖や見分けにくい発音があることから、完全に習得するには大変な努力と根気が必要なことも知った。やはり私達には、障がいを持っている人の苦勞や努力を直接学ぶことはでき

郡山市立日和田中学校 三年 鍵谷 咲妃

ないし、分からないこともたくさんある。でも分からないからと言って障がい者を変人扱いすることも、差別をすることも絶対におかしい。だから、このような偏見を少しずつ無くしていくことが大切だと思う。

障がいを持っている人の中には、生まれつき障がいを持っている人もいれば、ある日突然障がいを持つことになった人もいる。私だって、突然病気にかかるかもしれないし、事故に遭って障がいを持つことになるかもしれない。だから、今自分が当たり前だと思っている生活は、当たり前ではないのだ。いざ自分が障がいを持ったときに、周りの人にどう接してもらいたいか、障がい者を支えていく上でも重要になっていくのだと思った。

私の伯父は足に障がいを持っている。だから私達と同じように歩いたり、動いたりするのは難しい。でも祖父や祖母がその生活をさせてくれているのだ。家族である以上支え合っていていくのは当然なのかもしれないが、この支え合いは社会の中でも同じことがいえる気がする。困っている人がいたら助け合う。そんな社会になってほしい。そして私も、勇気ある行動が起こせる人になりたいと思った。

私は、障がいを持つ人にとって暮らしやすい社会とは、思いやりがあり、障がい者への偏見が無い社会だと思う。障がい者のための駐車場や電車の優先席を、健常者が独占しては

いけない。また、障がいを持っているからといって差別をしたり、偏見を持つたりすることも決して許されない行為である。

障がい者に対する理解を深め、困っている人を助け合える社会。これこそがこれから先目指すべき社会の在り方だと思う。

共生

共生、健常者と障がい者との差別なく、みんなが安心して生きる。私が祖父から教えてもらった言葉だった。

私の祖父は白杖をつけて歩く。緑内障という目の病である。私が生まれたころ発症し、この十五年で視野が狭くなり、文字も見えなくなってしまった。孫である私たち姉弟の顔は声を聞いて見分けをする。読書好きだった祖父は、今は、文字を読むことはできない。新聞も、本も読んで情報を得ることはできない。私たちが当たり前のように目で見て得る情報は音を頼りにするしかない。中学生になった今だから、ようやく祖父の障がいについて分かるようになった。

食卓に並ぶ食べ物も、色と形をいから想像して食べる。一品一品説明しながら皿に取り分ける叔父。小学生だった私は、なぜ祖父が自分で食べ物を取り分けられないのか、不思議だった。なぜテレビを観る時、近くに座っているのか、なぜ携帯を耳にあてて何かを聞いているのか分からなかった。腰の曲がっていない祖父がなぜ杖をつけて歩いているのか。しかも細くて折れそうな杖。歩くスピードもゆっくりと、わずか

郡山市立郡山第三中学校 二年 齋藤 莉穂

に見える視界と音をたよりに歩く。小学生だった私は不自由なことを聞くのが失礼なことなのではないか。そんなことばかり考えていた。ある時、思い切って聞いてみた。その時はじめて、だんだんと目が見えなくなる病気があることを知った。目が不自由だなんて信じられない。悲しくなったことを覚えていて。

一緒に住んでいるわけではないので、久しぶりに会うと、障がいだんだん進行しているのが分かる。その上、年若いしていく。悲しいのは祖父本人だろうに。でも、祖父はそんな様子は一つも見せずに、自分に出来ることを今でも元気に取り組んでいる。

その一つに、講演会活動である。祖父はもともと高校の校長先生であった。張りのある声で語り掛けるように話す。「私の人生はダブルヘッター」目に障がいがなく生きた約七十年を第一試合、障がいを患った人生を第二試合として、健常者と障がい者が共に生きることの大切さを伝えていく。「不自由だけど不幸ではない。」高校生を前に講演する姿は、生

き生きとして力強さを感じる。「かわいそう。」と思った私は、恥ずかしくなった。祖父は「白杖をもっていると、みんな親切でやさしく声を掛けてくれるから不安はないよ。でも歩いていて自動車は気が付くけれど、自転車は見えないんだ。後ろから抜かされるとドキッとすよ。一番かわいんだ。」そして、「みんながもう少し自分のことと、他人のことを大切にしてくれるといいんだけどね。共生という言葉覚えておくんだよ。」とやさしく話してくれた。

二〇二〇オリンピック、パラリンピックが開催される年になった。テレビの特集でパラリンピックの競技を紹介していた。バスケットボール、テニス、水泳など二十三種目にもおよび。車いす、義足、視覚障害、知的障害、聴覚障害など、障がいの程度によって種目も様々である。もちろんボランテニアの手助けも必要である。選手は、健常者と同じ環境でトレーニングをする。障がい者であれ、甘えは許されない。私は陸上部に所属している。もし、練習の時、障がいを持った選手と一緒にいたら、どのような行動をとったらよいのだろうか。こわいものを遠目で見るような態度をとるのではなく、同じアスリートとして互いに汗を流し、競い合いたい。私ができることは、祖父に教えてもらった「共生」という言葉を胸に、障がいのあるなしにかかわらず、お互いに良い

影響を与え合うこと。自分を、そして他人のことを思いやり、行動をしていきたい。

思いやりの心

郡山市立郡山第一中学校 三年 大原 あい

「障がい者という言葉で障がいを持っている人をひとくくりにしないで欲しい。」この言葉は、母が勤める生活介護事業所において、ボランティアをさせてもらった時、車椅子に乗った利用者の方に教えてもらった言葉です。障害を持っていても一人一人性格も趣味も違う。家族構成もこれまでの生き方もたくさんドラマがある。現実を受け入れられず悩み、苦しいこともたくさん経験してきたが、今こうして幸せに生きている。夢ややりたいことがたくさんあると聞いたとき、未来に向かって進んでいることにとっても衝撃を受けました。そして、障がいを持って生きるということが特別なことではなく、健康な人と何も変わらない一人一人の大切な人生であると感じました。

初めてのボランティアの時は、普段接することのない障がいを持った方に何を話しかけたら良いのか、コミュニケーションを取る事が難しく、不安で緊張し、固まってしまったことを覚えています。車椅子の方が並んでいる様子を見て、少し怖いと思ってしまいました。しかし、その不安はすぐに

消えました。なぜなら、一緒に過ごした時間が楽しく、健康な人と何も変わらないということが分かったからです。アイドルの話で盛り上がり、かわいい動物のデザインと一緒に考え、ポツチャに参加し、お茶を飲んで楽しくおしゃべりをしました。ただ、手足が不自由なので、出来ないことはスタッフの方がそっとサポートし、聞き取れないことや伝えられないことはスタッフの方が代弁してくれました。

また、障がいについて興味があるならば、「郡山こころのバリアフリー・ガイドブック」を読んで欲しいと勧められました。冊子には、初めて聞く難しい障がいの名前や、名前は聞いたことがあってもどのような障がいであるか分からなかったことが分かりやすくまとめられていたので、理解が深まり、改めて知ることの大切さを感じました。理解不足や偏見などの障壁をなくすためにもこの冊子をたくさんの人に読んで欲しいと思います。

偏見は、簡単になくなるものではありませんが、私は、障がいを持った方と関わりを持ったことで思い込みがたくさ

んあったことに気が付きました。実際に自分の目で見て感じるものが何よりも大切です。そして、偏見や固定観念にとらわれて凝り固まった価値観を持ってしまうことは、幸せな社会から遠のいてしまいます。友人が、障がいのある方を指さして「汚い、変、近寄りたくない。」という心ない言葉を言った時、それまでには感じなかった嫌悪感を抱くようになりました。でも、それが知らないということなのだと思います。前述したガイドブックにもあるように、障がいには、たくさん種類があり、その障がいの程度も様々で、健康な人と同じく高齢になれば疾患も多くなっていきます。自分自身や自分の家族に置き換えて考えることは難しいことですが、障がいがあっても結婚や子育て、進学や自分の夢の実現など、私達が描く将来と何も変わらないのです。周囲の理解が得られることやバリアフリーなどの物理的なことが整備され、年金制度の充実やヘルパー等のサポート体制が整うことで、障がいを持っていても社会で活躍できる機会が増えていきます。

また、心のバリアを外すために小さいときから障がいを持った人と触れ合う機会を持つことも大切です。お互いに寄り添い、接する機会が増えることで、私のように偏見をなくせる人が増えます。小さなことでも自分が言われて嫌なことは言わない。物事を自分に置き換えて考えられる人が多くなることで、誰もが生きやすく、住みやすい社会が訪れると思

ます。世界中の人々が手を携え、共に笑顔あふれる幸せな生活が送れるよう、温かな思いやりの心が増えていきますように。



【佳作】

みんなに知ってほしいゆうくんの事

郡山市立小原田小学校 四年 相馬 花奏

ゆうくんは、わたしの弟です。昨年の子の誕生日のころに、自閉スペクトラム症だということが分かりました。わたしは、それを聞いてびっくりはしたけれど、いっしょに生活している中では、変わりはありませんでした。

ゆうくんには、とくいな事と苦手な事があります。だれにでもある事だけど、わたしや他の人よりも、とくいな事と苦手な事の差が大きいので、困る事もたくさんあります。

ゆうくんのとくいな事は走る事です。足がとっても速くて、わたしがすぐに追いかけても、全然追いつけません。でも、あぶない事やルールを理解する事が苦手なので、車にひかれそうになる事があります。前に買い物に行った時も道路に飛び出してしまったり、お店の中を走ってしまい、すごくあぶない事がありました。心配で追いかけていたら、わたしが女の子の人に怒られてしまい、とても悲しい思いをした事もあります。今は、手をつないで歩く練習やルールを覚えられるようにカードを使って教えています。

前は出来なかったのに、出来るようになった事もたくさんあります。例えば、「おわり」が分かるようになった事です。好きな遊びを「おわりね」といったら、前は終われなくて泣いていたけれど、今はちゃんと自分から終わりにする事ができるようになりました。他の子には、これが当たり前だけれども、ゆうくんにとっては、すごくむずかしい事だから、わたしは「えらいね。」といってすごく褒めてあげます。

他にも物まねが得意だったり、歌が上手だったり、にこにこわらっていてかわいい弟です。苦手な事もまだまだあります。髪の毛を切る事がきらいだったり、待つ事が苦手だったり、暗い所や大きな音が苦手なので、家族やわたしが手伝って苦手な事を少しずつ、克服できるようにしていきたいです。ゆうくんについて色々考えてみると、心配な事もあります。幼稚園や小学校で、友達と楽しく生活できるか、ゆうくんの苦手な所をわたしや家族みたいに手伝ってくれる人はいる

のか心配です。近所の友達が時々ゆうくんと遊んでくれたり、わたしたちのように接してくれるのが、わたしはとってもうれいしいです。ゆうくんにもそんな友達がたくさんできるといいなと思います。

これを読んでくれた人の周りにも、障がいを持つ人がいると思います。わたしには関係ないと思わないで、家族のように協力してほしいと思います。障がいがある人となない人の普通は、全然違うので障がいがある人の気持ちをよく考えて、自分の出来そうな事から助けてあげてほしいと思います。わたしもゆうくんや障がいがある人の事をもっともっと知って、いっしょに楽しく生活していきたいです。

障害を持つ人への親切

郡山市立富田東小学校 五年 大迫 楓

わたしは、障害を持つ人についての作文にしました。どうしてかというと、障害を持つ人はたくさん不安や不満を持っていると思います。そこで、私達がしてあげられること、協力してできることを考えたからです。

私は、このことから障害を持つ人と普通に暮らしている人ではなぜこんなに「ちがひ」があるのか、疑問に思いました。

このような事を考えたのはあるきっかけがあったからです。それは、あるテレビで見た映画で耳の聞こえない女の子の友情の物語で、いじめにあっている子といじめをしている子の関係に感動したからです。そして、私はこの映画がきっかけで、身近にいる人だけではなく障害を持つ人にも思いやりの心を持つことがとても大切なことだと分かりました。また、もう一つみなさんに伝えたいことがあります。それは障害を持つ人たちと自分との関わりや、親切さです。障害を持つ人は、手、足が無かったり、目が見えない、耳が

聞こえない、自閉症などの障害を持っています。このような障害は、ふつうに生活している人とは接したり、話したりすることがむずかしいことが多くあります。なので、障害を持つ人はあまり友達などができない可能性があると思うので他の人などにいじめ、悪口、仲間割れなどのようなことをする人がいます。私はこのいじめなどにも不満を持っています。この時、障害者が、他の人とちがって不満を持っていても差別をしないできちんと向き合ってほしいと、思いました。また、その障害を持つ人が一人ぼっちでいたら、声をかけたり遊びなどにさそってあげたりする親切さも必要だと、改めて知ることができました。

このように障害を持つ人にもたくさん関わりや、親切さを持つことが今もこれからも必要となってくるんじゃないかなと思います。また、みなさんがこんな事を障害を持つ人にしてあげると相手の人もこの人と仲良しになって良かったなと、実感したり、その後の毎日もその人との関わ

りの中で楽しく過ごすことができます。この事で自分もこの障がいを持つ人のおかげで毎日が明るくなったという事もできます。毎日笑ったり楽しい事をしていたりしていると自然に障がいのことを気にせず楽しい一日を送る事ができると私は思いました。

そして、もう一つ思った事があります。

障がいを持つ人がとても暮らしやすい町にするためにその町の人達のたくさんの方の「協力」が必要だと思いました。例えば、朝、近所などの人が耳の聞こえない人にあいさつするときは「手話」、「会釈」などをしたりすることが障がいを持つ人が暮らしやすい町になる一つになります。また、目の見えない人には、やさしく、「〇〇さん、おはよう。」と、言ってあげたりすることです。障がいを持つ人にしてあげられる事は、他にもたくさんあります。このように町の人達が協力し合うとあいさつされた側の人もあいさつしてくれてうれしいと思うと、その思いやりの心を持つことができます。

また、その思いやりで町が豊かになっていきます。そして、障がいを持つ人も町の人も心が自然に豊かになっていきます。

このように、私は障がいを持つ人がよりよく暮らすためには、たくさんの方の協力や、親切さがとても重要ということが分かりました。また、いじめや差別などをしないで思いやりの

心を持って接することが大事ということも知ることができました。これから自分も障がいを持つ人の役に立つことをしていけるようにがんばりたいです。

障害者との関わり方

郡山市立永盛小学校 六年 大越 晴琉

ぼくの弟は耳があまり聞こえない障がい者です。なので、ぼく達と一緒に学校の学校でなく、聴覚支援学校に行っているの、いろいろな人の関わりが少ないとぼくは思っています。聴覚障がい者との関わりについて次の三つのことを考えてみました。

一つ目は、障がい者と学校で交流があればいいと思います。なぜなら障がい者の人達と学校がちがうので一緒に話をしたり勉強をしたりする機会がないからです。ぼくも弟と一緒に暮らしていて可哀そうに思う所があります。それは、学校から帰ってきてしまったら学校の友達は今近くにいないので、一緒に遊べないという事です。ぼく達は学校から帰ってきても周りにたくさん友達がいるから一緒に遊べるけど、弟は周りに同級生もいないのでなかなか遊べなく、学校の友達とは学校にいる時にしか遊べません。ぼくの友達は弟の事を遊びに混ぜてくれるので弟もうれしそうに一緒に遊びます。弟もぼく達と同じ学校に行けたら良かったけど理由があって行

けません。学校で一緒に交流会や勉強などを楽しくやって友達になれたら障がい者の人もうれいと思つし、障がい者の人とそうじゃない人との関わりも深まると思っています。

二つ目は、障がい者のことを考えるという事です。障がい者は耳が聞こえなかったり、どこかに障がいがある人です。ぼくの弟は、補聴器をしています。ぼくの家族は補聴器をしている事は当たり前と思つているけど、初めて弟に会う人は「変だな」と思つて「耳に変なの付いてるよ」と言われ馬鹿にされて傷つたことがあります。でも、耳が聞こえなくて補聴器をしている事を教えると、みんな弟と一緒に遊んでくれます。

ぼくの弟はサッカーが好きで、サッカースクールに行つています。みんな話かけてくれて優しくしてくれます。コーチもいつも弟をサポートしてくれるので、大好きなサッカーをとても楽しくやっています。ぼくは「みんな優しいな、ありがとう」という気持ちになります。

三つ目は、障がい者の人と話をしてあげるといふ事です。障がい者は話が出る人もいるし、ぼくの弟みたいになかなか話が上手に出来ない人もいます。耳が聞こえない障がい者は手話を使います。弟が話をしてくれない時があります。ぼくはその時に弟に、「もう一回、もう一回」と、言っただけで話してもらおうけど弟もわかってももらえないと「分からない」と言っただけで話が終わってしまう事もよくあります。弟は学校でいろいろな手話を覚えてくるけど、ぼくは学校で手話の勉強はしません。でも、手話は弟と話をする時に必要なのでぼくも手話を覚えて、弟が話をしてくれる時はただ聞くのではなく、弟が言ってる事をしっかり分かってあげようにしたいです。耳が聞こえない人と話をする時は、いつもよりゆっくり大きな声で話をしたり、手話や身振りなどをつけていたりするとわかりやすいので、みんなにも話をする時にはやって欲しいと思います。

障がい者だから友達にならないのではなく、障がい者だからこそ一緒に話をしてあげたり、遊んだりする事が大切です。みんなが楽しめる交流の場所がこれから少しずつ増えていけば良いとぼくは思います。

スポーツをとおして

私は生まれた時から元気な子です。走ることも泳ぐことも

体を動かすことが大好きです。私の祖父は体の右手、足が動きません。それは病気の後遺症です。たくさんリハビリして杖をつけて歩くことができるようになりました。病気になる前はもちろん走ることも泳ぐこともできていたのに出来たことが出来なくなるってどうなのだろうと思いました。もし私の足がなくなってしまったら、目が見えなくなったらと思うと暗い気持ちになりました。そんなふうに思っていた私が、二〇二〇東京オリンピックのニュースでパラリンピックというのを知りました。

オリンピックは知っていたのですがパラリンピックって何かなと思って見ていると、色々な障がいのある人たちが陸上、水泳、テニスなどをしている姿を見ました。すごいなあと思いました。障がいのある人がスポーツをする。私だったら、とてもみんなの前に出るのもその前でやることなんて出

来ないと思いました。

私は、スイミングに体操教室と習い事をしています。でも私の習い事の場所に障がい者の人はいません。たまたまかも知れませんが、私は障がい者の人のスポーツをテレビで見ることがありません。

では、どこで、いつ障がいの方はスポーツができるのかなと思いました。私のようにふつうにやることは出来ないのだから、専門の先生などが必要なのだろうと思いました。だって、耳の聞こえない人もいれば、目が見えない人と色々な人がいるのだから。どんなスポーツにもコーチがいるけど私たちのコーチと障がい者のコーチは違うだろうと思いました。

たとえばプールで泳ぐにも耳が聞こえなければスタートの合図が分からないし、目が見えなければゴールが分からない。だれかが教えなければなりません。すごく大変なことか

もしれないけどスポーツ好きの私は障がい者の人にもたくさんスポーツをしてほしいと思いました。

障がい者の人がスポーツを習うことは大変だろうけど、教える人も少ないのだと思います。でも今の私にはどう教えるか想像もつかないし、何に気をつければいいのかもわかりません。なので、障がい者の人たちと一緒にスポーツをしたいです。たとえば走ることで、足のない人、目の見えないう人、障がいによって助けるところも違うので一緒にやってみようかいいんだ。と知りたいです。交流をもてばお互いに学ぶこともあるし、友達にもなれるかもしれないと思います。習い事でも地域でも学校でもいいので障がい者と一緒にスポーツが当たり前のように出来るようになるのもっと、もっとスポーツが楽しくなるように思いました。また、前のように、ポツチャを障がい者と楽しくやったり、踊ったりすると、いい体験かなと思いました。

私も障がい者のスポーツがたくさんわかりません。ですが、たくさんの人に理解してもらいたいと思いました。

私も、前に体験したり、テレビを見てパラリンピックに興味を持ったので、東京パラリンピックをテレビで見たいです。そしてスポーツの楽しさは障がい者も一緒なんだと感じてみようと思いました。そして、スポーツは障がい者も心から

楽しんで、できるのだと思いました。

障害者と私達の生活のちがい

郡山市立永盛小学校 六年 吉田 結衣

私が障がい者の生活について思ったのは、腕が上がらない人の生活の場合、服を着たり、起きたりするのが大変そうだなと思いました。そしてほかにも視覚障がいの人は、ご飯を食べる時まちがえてお汁をこぼしてしまつこともありそうだし、郵便で届く手紙なども何が届いているのか、誰宛なのか、どんな内容なのかも分からなくて、不便な生活をしています。今出した例以外でも、聴覚障がいの人は口の動きでしゃべっている事を理解していたが、コロナウイルスでマスクをしているため口の動きが分からないとインターネットに書いてあり、障がいの人はそういう悩みを持っていてつらい思いをしている人だなと分かりました。

次に私たちの生活は、聴こえたり、見えたりするので、物が近くにあっても探す必要がないし、お汁などの汁物類をこぼすリスクがとて減ります。そしてコロナウイルスでマスクをしていても聴こえます。

そこで私が障がい者のために考えたのは、障がいの者のための介護ロボットです。どういう介護ロボットかという、目

が見えない人は、しゃべってそこに何かがあるよとか、その郵便物は誰宛だよ、こんな内容だよ、と障がいの者にやさしく教えてくれるロボットで、他にも腕の障がいの者の場合、人みたいに服を着させてあげたり、起こしてあげたりしてくれるロボットで、大変だったりしたら、急いで助けてくれる、ロボットです。耳の障がいの者の時は、その人が言ったことを直接紙に書いたり文字を打って教えてくれるロボットなどがあつたらちょっとだけでも障がいの者が楽になるんじゃないかなと思いました。

他にも、赤の他人が障がい者だった場合、目が見えない人だったら、信号の時、言いづらくても今は青ですよと伝えたり、今は信号が赤になりそうなのでわたらないほうがいいですよと一声かけるだけでも、一人の命が守れるかもしれせん。そして、足が不自由な人が電車に乗っていたら、足が不自由な人は立っているのがつらいなと思つているので、

「この席、すわってください。」と声をかけるのも大事だなと思いました。

つぎに私が考えたのは、バリアフリーを増やすことです。バリアフリーを増やすというのは、どういうことかと言うと、手すりや点字ブロック、スロープなどを増やしたりすることです。増やすことにより、視覚障がいの方がちょっとだけでも生活しやすくなると思います。そして車いすで生活している人にとっては、スロープを増やすことで上ったり、下ったりするのが楽になります。なので、障がい者のために、点字ブロックやスロープなどを増やした方がいいなと思いました。

最後に私が考えたのは、もっと障がい者とふれあうことです。障がい者といってもいろいろな障がい者がいます。聴覚障がい者だったら、手話や紙などに書けば、話すことはできます。そして、障がい者と話すことによって、障がい者の思いなどが分かります。そして自分がもしも障がい者だったらと考えてみて、自分だったらこう思うなと障がい者の気持ちと自分で考えた気持ちを比べてみるのもいいかもしれません。だから、その障がい者の気持ちを小さい子などが分かるように、学校や幼稚園で障がい者になりきるイベントみたいなのをやれば、障がい者はこんなにつらい思いをしてるんだな、大変なんだなとわかるのではないかと思いました。

「できること」を「しつこく」

今、私たちが生活しているまちには、障がい者のための様々な工夫があります。例えば、視覚障害の方のための点字ブロックや、音で知らせる信号機などは、登下校の道でも度々見かけることがあります。また、車椅子の方やお年寄りの方のためのスロープなども、誰もが住みやすいまちをつくるための工夫です。他にも、たくさんの方がまちにはあふれていて、障がい者の方にも優しいまちづくりが進んでいます。さて、今までもたくさんの方が工夫によって様々な設備などが生まれてきていますが、さらによりよいまちをつくっていくために、私たちにできることは何でしょうか。

障がい者の方のためにできること、と言うと実際にどんなことをしたら良いのか、自分にはどんなことができるのか、分からない人もいます。そんな中で、まず私たちができることは、「障がい者の方について考える。」ということだと思います。みなさんは、「障がい者」という言葉を聞く時、どんなイメージを持ちますか。「私達とは違って、普通の生活が送れない人」なんていう考えを持つ人もいるかもしれません。私も今までは、障がい者の方というと、一人で生

郡山市立郡山第二中学校 一年 田村 実愛

活することが厳しかったり、普通に生活することが難しい人たちだと思っていました。ですが、障がい者の方たちの本を読んだり言葉を聞いたりしているうちに、だんだんと考え方が変わりました。確かに、障がい者の方たちは、私達が「当たり前」と思うような部分が欠けてしまっているかもしれない。しかし、どこかが欠けているのは私たちも同じです。勉強が苦手、体を動かすのが不得意、人とうまく話すことができない。そんな風に、私たちはみんな、どこかが必ず欠けているのです。障がい者の方は、その欠けている部分が「障害」となってしまっただけで、私たちと大きな違いがあるわけではありません。もちろん、その障がいによってたくさん悩んだり、苦しんだりすることも多いと思います。ですが、私たちはみんな「欠点」という「障害」を抱えていて、それを持ちこえるために向き合っています。それに、障がいがあるからと言って、何もできないわけではありません。目が見えなくなったり、この広い世界を歩いていくことができません。耳が聞こえなくなったり、自分の目でこの世界を見ることができません。うでや足、体の一部が動かなくなったり、前を向いて

進んでいくことができます。障がいがあっても、自分の好きな道を自由に進んでいくことができます。私たちが「障がい者だから」と言って、可能性を否定してしまうことが、障がい者の方にとって、とても辛いことだと思います。ですがきっと、一人ではできないことや、誰かの助けがほしい時だけではありません。そんな時に、私たちが手を差し伸べることができたら、よりよいまちへとつながっていくと思います。「困っている人がいたら声をかけて、助けてあげたい。」なんて口にしても、実際に行動を起こせるのか、と聞かれると、私は悩んでしまうと思います。ですが、その一言が、その勇気が、誰かのためになるのなら、一步を踏み出すことができると思います。私たちが人間はみんな、どこかが必ず欠けていて、欠けているところを補うことができるのも、また人間です。私たちが目指すまちをつくっていくためには、一人一人が障がい者の方のためにできることを考えて、行動することが大切だと思います。

誰もが暮らしやすい、よりよいまちを目指すためには、私たちに何ができるのか、どんなことをしたら良いのかを、それぞれがまず自分の頭で考えることが大切です。そして、自分なりに考えた答えを実際に行動に移すことができましたら、今よりももっとよりよいまちづくりができると思います。一人の力では何もできなくても、小さな勇気が集まれば、きっと

大きな力になると信じて、よりよいまちづくりへの一步を踏み出しましょう。

障害を持っていたとしても

障がい者の人達とのふれあい方について、これは、難しい問題だと思う。まず、障がい者とひとまとめに言っても、頑張って社会に溶け込めずにいる人もいる。障がいを持った人に対して、偏見を持った人も多いと思う。

私の卒業した小学校のクラスには、「ダウン症」という障がいを持った女の子の友達があった。ダウン症とは、染色体の異常で起こり、約千人に一人の割合で起こる障がいのことだ。ダウン症のある子は、全般的にゆっくり発達することが多いそう。確かに、その子も小柄で、運動も得意ではなかった。

その子は、いい子だった。例えば、私の誕生日にメッセージカードをくれたり、自分でやると決めた仕事を頑張ったり。この子の、こんな素直でかわいところ、私は大好きだ。だが時々問題を起こしてしまふこともあった。その子は、自分がしたくない事、嫌いな事をする、固まってしまう時があった。何を言っても聞かずに、その場で動かなくなってしまうのだ。無理にやらせようとすると抵抗したり暴力をふるったりするため、こうなると先生を呼ばなくてはならない。だ

郡山市立郡山第二中学校 一年 遠藤 美佑

から、しばしば先生の話の内容にこれが入ってくるがあった。それだけならともかく、一つ私の心に重くのしかかった事件があった。

その子は、とても優しい女の子のことが好きで、その優しい子と一緒にいることが多かった。私は、ずっと仲が良かったなと思いつつ見ていた。だがある日、私と数人の女子が担任の先生に呼び出された。不安に思いながら先生の話聞いてみると、私は段々息がつかまっていった。その優しい子が、他の小学校に転校するかもしれない、ということを知ったからだ。理由は、その障がいを持った子にされるのが辛くて、学校に行きたくないからだと言われた。私は悲しかった。近くで、優しい子の辛さに気付けなかったことだけではない。その子がしてはいけないことをした時、正しく教えられなかったことが悲しいのだ。そこで私は考えた。その子と、どう接して過ごすのが正しいのかを。

まずは、してはいけないことをした時に、しっかり教えることだ。二度とこんなことが起こらないように。障がいを持

っているから、してはいけないことをしていい訳ではない。敵しいことを言っているかもしれないが、私はそう思う。

そしてもう一つ、普通の人と同じように接することだ。さつきも言ったように、障がいを持っているから何もできない訳ではない。特別な理由がなければ、普通の人と同じように接する事も大切だと思う。もし、下手に特別な扱いをして、それが当たり前だと思われたら、大変な事になる。人に頼ってばかりの生活をし、大人になってから困るのはその人自身だ。その人のためにと思ってやって、結局はその人が苦しむ、なんて事が起きてほしくない。だから私は、極力、障がいを持った人にも普通に接していきたいと思う。

初めに、障がいを持った人に対して偏見を持った人も多いと思うと言った。実は私も前まではそうだった。でも、障がいを持った人達とふれあっていく内に、その考えも変わっていった。だから、障がいを持った人と関わることもある時は、一度、自分の偏見や先入観を捨ててふれあってほしい。きっと、考えが変わってくるから。そして、一番やめてほしいのは、障がいを持った人に嫌なことをすることだ。障がいを持った人だって辛いことは辛いし、悲しいことは悲しい。無視したり悪口を言ったり、ましてや、いじめるなんてしてはいけない。

ここまで色々なことを言ったが、結局私が言いたい事は、

「障がいを持っていて、仲良くなれる」という事だ。私はこれからも、この事を忘れずにいようと思う。

障害者と共に生きる

私には「ごまゴマクッキー」という大好きなお菓子があります。このお菓子は、郡山市小原田にある「Sweet hot」という小さな喫茶店を兼ねたお店で売られていて、幼稚園生の頃から母と幾度となく訪れたことがあります。

ここには、人懐こい店員さんがいていつも笑顔で対応してくれます。幼稚園生の頃には気が付きませんでした。ここは「就労継続支援」のための福祉事業施設ということを知りました。「就労継続支援」とは何か、調べてみました。基本的に一般就労と違いがありませんが、障がいや難病がある方が雇用契約を結んだ上で一定の支援がある職場で働くことが出来る福祉サービスの一つであるということが分かりました。確かに、店員さんは注文を取る時に何度も聞き直したりメモを取る時に一生懸命書き直したりしています。けれど、常に笑顔で一生懸命仕事をしている姿はとても印象的です。私が幼稚園生の頃、皿を割ってしまった事がありました。その時みんなが集まってきて、

「ケガはなかった？大丈夫だった？」

郡山市立安積第二中学校 二年 山本 芽依

と、とてもやさしく心の底から心配して接してくれたことを覚えています。

私が大好きな「ごまゴマクッキー」は、心を込めて一つ一つ手作りをしているそうです。運営の方から、

「障がい者が作っているからという同情から買ってもらうても嬉しくない。」

という話を聞きました。市場に出すには、どこにも負けない味で、この味を食べたいから買ってもらうなと意味がない、という生産者としてのプライドを持って作っているそうです。そんな心のこもったクッキーを、カルチャーパークの入り口売場で「郡山銘菓」の郡山を代表するお菓子として売られているのを見かけた事があります。その時私は、「このクッキー、最高に美味しいよ！」と市外から遊びに来ている人みんなに教えたくてたまりませんでした。

障がい者は、一つの物事を行うのに少し時間と手助けが必要なのかもしれません。けれど一つの物事に真摯に向き合い、プライドを持って仕事をする姿は、私たちの見本となるべき

姿であります。そして、就労支援施設を運営している母の知人は、いつも明るく障がい者の方々を見守り、そっとサポートして、素敵だと思いました。

現在、日本には心身に機能の障がいがある人が十六人に一人おり、増加傾向にあると言います。私の知っている店員さんのように、生き生きと仕事をする場所に巡り合っている人はごくわずかなのではないでしょうか。現に、日常の生活の中で関わる機会が少なく、働く姿を見る事もほとんどありません。働きたくても「みんなと同じように作業ができないから」「迷惑をかけてしまうから」このような理由で仕事を得られない人がいるというのはとても残念なことです。障がい者にとって過ごしやすい環境をつくるには、同じ平等な人間として「助け合える」社会をつくるのが大切だと思います。そのためには、障がい者と健常者の間に壁をつくらずに、障がい者への理解をより深めることが重要であると思います。障がい者も、彼らなりに努力をしているのだということを理解し、支援する。もし困っているようであれば、助けてあげる。できるだけ多くの人がこのような意識を持つことで、少しずつ良い環境へと変えることができるような気がします。

以前近くのスーパーで買い物をしていた時に「Sweet hot」の店員さんが私達に走り寄ってきて「またお店に来てね。」と声をかけてくれたことがあり、顔を覚えていてくれたこと

への嬉しさをよく覚えています。そのような温かい心をもっている方々にとって、この世界が居心地の良さを感じられる環境であること、そして、彼らがいっきもと活躍できる場が広がっていくことを心から願っています。

学ばなければならぬこと

私には障害者手帳を持つ祖母がいます。祖母は外に出かけることが好きで、一人で車を運転して買い物などに出かけます。出先では必ず車椅子のマークがついているところに駐車します。そして、ゆっくりですが歩いて買い物します。私と一緒にいったときは荷物を持つ手伝いをします。

しかし、車椅子の方や目や耳が不自由な方はどうでしょうか。一人で車を運転して買い物ができる方は少ないのではないのでしょうか。今、公共施設や行楽地など様々なところで、バリアフリーだったり、点字や介助犬可であったり少しずつ障がいのある人も共に暮らしやすい街づくりがされてきていると思います。障がいのない私は不便だと感じることはあまりないですが、まだまだ改善できることがあるのではないかと思います。街の中を見てもずを感じることは、歩道の整備です。震災後、歩道のブロックのがたつきが目立つようになつたなと感じます。普通に歩いていても、つまずくことがあります。これが、身体に障がいのある人だったら転んでいるのではないかと思う時があります。それから点字ブ

郡山市立郡山第三中学校 二年 赤沼 優香

ロックです。スーパーに敷いてある点字ブロックの上にはいつも誰かの自転車が停められています。お店の方は気が付かないのか、除けてもまた別の人が停めるのか、たまにこの点字ブロックはここに敷いてある意味があるのだろうかと思う場所もあります。歩道が狭いところでは、住宅の植木などの枝葉が伸び放題であったり、駐車スペースからはみ出して駐車している車があると、その分さらに歩道が狭くなって危険だし、歩きづらいなと感じます。福祉サービスなどはどうでしょうか。サービスを受けたくても受け方がわからなかったり、嫌な顔をされたり拒否されたりしてないでしょうか。こうしてみるとまだまだたくさんの課題があるのがわかってきました。

「障がい」と一言で言っても色々なハンディキャップがあります。私の知らない現状はまだたくさんあります。学ぶこと、知ることがたくさんある中で、改めてこれからの接し方を考える必要性があると感じました。親切の押し売りみたいにならないよう、本当の優しさで接していかねければなら

ないと思います。その本当の優しさとは、相手のことを尊重して対等の人間として見ることだと思います。

今の現状と私たちができること

郡山市立郡山第五中学校 二年 土田 紗友莉

私達が、今住んでいる世界は本当に暮らしやすい環境なのだろうか。私はそう思えない。なぜなら、世界の問題の一つである差別が日本だけではなく各国で起こっているからだ。私は差別によって亡くなった人がいるということを知り、怒りを感じた。

私たちの周りには、体に障がいを持つ人がいる。しかし、障がい者との関係が良いとは考え難い。よりよい福祉と町づくりのためにどのようなことが必要か、さらに私達ができる事について考えた。

私は最近、病院へ行った時に耳が不自由な患者さんに対して手話で対応している人を見た。手話はコミュニケーションの一つであり、相手の目と顔を見ながら会話をしていた。私は、手話の重要性を知り、興味を持った。もし私が難聴になったらどのような気持ちになるのかを考えた。一人で生活をする場合どのように過ごすのか。手話を全て覚え、人と話すことができるのか。さらに、学校でいじめを受け、見えない所で悪口を言われると思う。とても気分が悪く、学校へ行きたくないと思うだろう。私は、音がない世界について不安を

感じた。また、私は盲導犬と一緒に歩いている人を見かけたことがある。盲導犬は、目が不自由な人を手助けするための特別な犬である。私が盲導犬の近くを通った時は吠えなかった。ペットとして飼われている犬なら暴れていたかもしれない。とても驚いた。目が不自由な障がい者も不便なことがたくさんあると思う。自分の親や身近な人の顔が見えないことや、周りの景色を見ることができないなどが挙げられる。現在、目が不自由な人をサポートするために私達の身近でも様々な工夫をしている。まず、点字についてだ。点字は、ジヤムのビンやエレベーターなどの身の回りにたくさん使われている。私は以前、ビンにある点字を点字表を利用し、読んだことがある。私はとても苦労したが、目が不自由な人は触れることにより、何と表記されているかをすぐに分かるので驚嘆した。また、シャンプーのボトルや、リモコンには凹凸がある。この凹凸によって見分けているのだ。さらに公共場所の一つである駅では、バリアフリーに対応している所が多い。例えば、車イスに乗ったまま移動ができる階段昇降機や音声案内版の設置、さらに車イス対応のエスカレーターや、

手すりの増設工事が進められている。これらは、駅だけではなく誰もが利用する場所に多くあり、身の危険を回避することが出来る。とても良い取り組みだと思う。

それでは、私達に何が求められているのか。手話ができる人を増やし、障がい者についての授業や教室により、一人一人考えるきっかけを作ることだと思う。また、障がい者の雇用について考えた。私は、障がいがあるなしに関わらず一緒に平等に働くことができる環境をもっとつくる必要がある、労働に見合った賃金を払うべきだと思う。さらに、障がい者の気持ちを考え、時には寄り添い、苦しさや楽しさを分かち合うこともわたしたちができることだ。

世界は、今でも多くの人が障がい者について偏見にとらわれていると思う。私は、今まで障がいがある人を遠ざけ、見て見ぬふりをしてきたかもしれない。今後は、間違った思い込みを無くし、正しい知識を身につけていきたい。私は、これから手話についての勉強をしたいと思う。理由は、実際に病院で手話を用いた会話を見て、手話をもっと知りたいと思ったからである。本当に小さな活動かもしれないが、人に寄り添える自分に近づくとと思う。私は、障がい者にとって役に立つ行動は何かを考え、実践できるようにしていきたい。そして、私の周りに何か困っている人がいたら進んで手を差し伸べられる人になりたいと思う。

Feelings for each other

郡山市立郡山第一中学校 三年 佐原 佑徠

私たちの身近にも「盲導犬」がよくみられます。目の見えない人・見えにくい人が安全に歩けるように、段差を教えたり障害物を教える、また角を教えたりしています。この三つが盲導犬の主な仕事です。そんな盲導犬と貴重な体験をしたことがあります。

私が小学校高学年のとき、私は母と妹と近所のスーパーに行きました。母たちと野菜などを見ていた時、隣に盲導犬と目の見えない人が来ました。私は犬が好きだったので「こちらの犬、とてもかわいいですね。」と盲導犬の頭をなでようとしたら、その目の見えない人が「この犬は、今仕事仲間なんですよ。だから申し訳ないけど、仕事を頑張らせてあげてね。」と優しく私に言いました。私はその時、盲導犬はがんばって仕事をしているのに私が仕事の邪魔をしてしまったんだ、と改めて思いました。そして、その人と盲導犬は店を出るまでずっと寄り添っていました。

私はこの貴重な体験をしてから、盲導犬について詳しく知りたいなと思うようになりました。盲導犬というのは、視覚

障がい者を安全に快適に暮らせるように誘導する犬です。また、身体障がい者補助犬の中で、最も広く知られている存在であるそうです。日本語の由来は「盲人誘導犬」といいます。

またこの体験を通して、感じたことがあります。盲導犬は視覚障がい者の方々を助けたり誘導することだけが盲導犬の役目だと思っていました。しかし、盲導犬を詳しく知るにつれ、違う仕事もあるのでないかと感じるようになりました。それは「大切なパートナーであり、家族の一員である」ということです。もちろん補助したりすることも大事な仕事ですが、つらいときや悲しいとき、苦しいときなどにあたたかなぬくもりも与えてくれることも一つの仕事だと思えます。私は「盲導犬」という生き物に大切なことを教わる事ができたと思いました。

私は盲導犬について詳しく知っていなければ障がい者の方々のことを深く考えていなかったと思います。私はテレビで障がい者の方々について取り上げていた番組を見ていました。その時「Feelings for each other」という言葉が耳

にたまたま入ってきました。その意味を調べると「お互いを思いやる気持ち」という意味だそうです。私は、障がい者を受け入れる人たちと私たちを受け入れる障がい者の方々がお互いに思いやる気持ちが大切であると思いました。まだ、障がい者の差別が世の中にはあると思います。お互いを思いやる気持ちが一人一人になればこの世の中を変えていけます。障がい者の方々は、障がいを一生背負っていかなければなりません。私たちが想像しているよりもとても大変だと思っています。だからこそ、私たちがまわりの人たちが支えあって障がい者の方々も居心地の良い環境をつくってあげることが一番大切だと思います。

私は盲導犬の関わりを得て、重要であることを二つ学びました。一つ目は、お互いを思いやる気持ち。二つ目は、居心地の良い環境づくり。この二つは誰にでも出来る事だと思います。一人一人が心を変えれば、周りも変わっていくはずですよ。

私は、改めて大事なことを学べた気がします。今後、障がい者の方々をお見かけしたら、優しく見守ってあげたいなと思います。そして、心の中に「Feelings for each other」という魔法の言葉を唱えたいです。

思いやりの心を広げるために

郡山市立郡山第一中学校 一年 五十嵐 眞子

私は、小さい頃から近所のスーパーなど、街の中で盲導犬を見かけたことがあります。小さい頃は、盲導犬のことをあまり良く知りませんでした。どうして店の中に犬がいるのだろうか、いつも見ている散歩のリードとちがうのはどうしてだろうか、と盲導犬を見るとそう思っていました。

ある時、道端で盲導犬を連れた方を見かけました。すると、近くを歩いていた子供が「かわいい！」と犬にかけ寄りました。その子は犬に触ろうとしましたが、その子と一緒にいた女性の方が「今は、お仕事だから触っちゃだめだよ。」と言いました。その時に私は、犬の仕事ってなんだろう、と思いました。

そのようなことがあり、更に盲導犬について関心が深まり、盲導犬について調べてみようと思いました。

日本に初めて盲導犬が来たのは、一九三九年、ドイツからの四頭のシェパードだということが、調べて分かりました。この四頭のシェパードは、戦争で失明した兵士達の社会復帰のためにドイツから上陸しました。盲導犬の主な仕事は視覚障がい者のために曲がり角を教えること、段差を教えること、

障害物を教えることの三つです。その他にも、近くのドアや改札などの目標物まで誘導することもあります。

目の不自由な方の中には、全く見えない全盲の方、見えにくい状態の方がいます。また、生まれた時から目が不自由な方ばかりではなく、病気や事故で途中から目が不自由になった方もいます。深く考えると、視覚障害になってしまう原因は、私達の身近なものでもあるのだと思いました。

私も、目を閉じて外の歩道や道を歩くことを想像すると、どこに何があるのか分からないので、とても不安になると思います。しかし、盲導犬がいることで視覚障がい者の方の不安は軽減されるのではないかと思いました。そしてこのことから、盲導犬は視覚障がい者の方の目のかわりに、そして心の支えになっている、ということを知ることができました。全国で活躍する盲導犬頭数は、千頭余りだと知りました。全国に対して千頭という盲導犬の数はとても少ないこともあり、盲導犬を受け入れる店や施設にばらつきがあるそうです。私は視覚障がいを持っていての方への接し方や、盲導犬についての知識が、もっと社会に広がることで、視覚障がい者

の方がより安心して社会での活動ができるのではないかと
思います。そして、私達が明日にでも手伝いができることは、
盲導犬に出会ったから見守ること。盲導犬が集中力を欠くと、
盲導犬も視覚障がい者の方も安全に歩けなくなってしまう
ことがあるからです。盲導犬には信号を判断できないので、
信号を待っているときは「赤」なのか「青」なのか、また、
困っているときは、一言声をかけてあげることが、視覚障が
い者の方の安心、さらにその方への思いやりにつながるのだ
と思います。

振り返ると、私も身の回りの方々の思いやりに包まれて生
活していることに気づかされます。大切なのは、相手の求め
ていることを知り、幸せを願って見返りを求めず、自分がど
う行動できるかだと思います。

障がい者の方が求めているものは何か、社会、そして私達
が障がい者の方のために何ができるのか、深く考える必要が
あると思います。

これから、ここで学んだことを大切に、まずは私でもでき
ることを実行していきたいと思います。



講評

福島県公立学校 退職校長会 郡山支部 監事 渡辺 嗣雄

令和二年度「郡山市おもいやり作文コンクール」に、小・中学校の皆さんから多数の応募があり、審査員一同が感動しつつ読ませていただきました。作品は、障がい者に対する深い理解と障がい者福祉について真剣に考えた内容でした。皆さんの多様な考えを五つの視点から感想としてまとめてみます。

一 「おもいやり作文」の共通点は「共生」です。共生とは、障がい者も健常者も差別なく生きることであり、自分の事も他人の事も大切にすることです。共に思いやる気持ちが必要です。

二 障がい者を理解するために家族との関わりや身近な地域の生活圏から調べて作文を構成しています。

○生活を共にする兄弟・姉妹や祖父母など

○養護学校との交流行事やスポーツクラブの交流から

○新聞・テレビからのヒントや漫画、映画から

○福祉事業施設での見聞からヒントを得て作文を構成する。

三 国際的な広い視野から内容を構成する。

○海外ニュースから「人種差別、飢餓、難民、内戦」などに気づいて取り入れる。

○国連サミットで採択された「SDGs十七の目標」第十『人や国の不平等をなくそう』から引用し、障がい者の差別について考える。

この二点の作品は、今後、福祉や障がい者について大きな視点から身近にある福祉や障がい者について考えることの大切さを示唆している様に思われます。

四 応募者の「思いや願い」

- 偏見や先入観を捨てて共生のできる社会を目指す。
 - 差別をなくすには、障がい者を個性として理解し、障がい者と健常者が、お互いに受け入れる。
 - 障がい者が活躍できる職場を増やす。
 - 困っていることのアンケートを取り、解決策を模索し、出来る事から問題を解決し、障がい者の暮らしやすい社会を作る。
 - 歩道への違法駐輪や違法駐車をなくす。歩道まで伸びた庭木の手入れ。
 - 障がい者は、それを克服するために努力しているので相手の気持ちを考えて行動する。
 - 本当の思いやりとは、障がい者に対する理解を深め、何を求めているのかを察知し、どう行動するかである。
 - 手話を覚えて交流を図り、障がい者の気持ちをもっと理解したい。
- など、多くの考えがありました。

障がい者も健常者も一生懸命頑張っています。今後、皆さんの思いや願いは、いろいろな機会を通して広げ、両者が暮らしやすい社会を求めていって欲しいです。これからの福祉社会を実現していくのは、皆さんです。

終わりに、受賞された皆さんや応募された皆さんに対し、心より賛辞を贈ります。

作文のご指導くださった先生方、側面からご協力いただいたご家族の皆様方に御礼を申し上げ講評といたします。

令和二年度「郡山市おもいやり作文コンクール」実施要項

- 一 目的
障がいに対する関心を高め、障がい者福祉を考える機会として、市内の小・中学校の児童・生徒を対象に障がいに関する作文を公募し、優秀作品集を公表することにより、障がい者に対する理解を深めるとともに、児童・生徒の障がい者に対する意識の高揚を図る。
- 二 主催
郡山市
- 三 共催
郡山市教育委員会
- 四 募集対象及び部門
市内在住又は市内の学校に在学する小学生四年生から六年生まで及び中学生
(1) 小学生の部
(2) 中学生の部
- 五 募集作品
(1) 内容
障がいのある人と自分との関わりの中で感じたことや、障がいのある人にとつての暮らしやすいまちや福祉について考えていること等を表現した作文とするが、主題については、応募者の任意とする。
(2) 様式等
一人一点・四〇〇字詰め原稿用紙（B4判）縦書き四枚以内
- 六 応募方法
応募者は、応募票（様式1）と作文を各小・中学校に提出する。小・中学校は、応募者名簿（様式2）を作成の上、作文、応募票及び応募者名簿を提出する。
- 七 応募期限
各学校から障がい福祉課への提出期限 令和二年九月三十日（水）

八 応募先

郡山市 保健福祉部 障がい福祉課
〒九六三―八六〇― 郡山市朝日一丁目二十三番七号
TEL 九二四―二三八一

九 賞

最優秀賞二名（小学生・中学生 各一名）、優秀賞六名程度、佳作十名程度

十 審査

(1) 審査会

審査会の審査員は、四名とし、以下の者で構成する。

ア 郡山市 障がい福祉課長

イ 郡山市 学校教育推進課長より推薦された指導主事等 二名

ウ 福祉関係者 一名

なお、審査会会長は、障がい福祉課長とする。

(2) 審査基準

優秀作品の選考に当たっては、次の基準により行うものとする。

ア 障がい福祉に対する理解を深める趣旨に合致していること。

イ 誰でも分かりやすいこと。

ウ 豊かな表現力であること。

エ テーマによって必要とする基準については、審査員の協議により設けることができるものとする。

十一 その他

(1) 入賞者には、賞状及び記念品を授与する。

(2) 応募者には、参加賞を授与する。

(3) 児童・生徒から小・中学校への提出期限は、各学校が定める。

作文応募状況

【小学生の部】

4年	5年	6年	計
20	14	24	58

【中学生の部】

1年	2年	3年	計
41	29	33	103

応募総数	161
------	-----

令和2年度
郡山市おもいやり作文コンクール
優秀作品集

令和2年12月

■編集／郡山市保健福祉部障がい福祉課

〒963-8601

郡山市朝日一丁目23番7号

電話：024-924-2381

FAX：024-933-2290

<http://www.city.koriyama.fukushima.jp>